

伍拾周年記念小寫眞集



昭和34年 卒業写真(長田高校通信教育部の時代)



昭40・41年 青雲高校独立と第1回卒業式を報ずる生徒会報



右上 昭和42年6月 兵庫通信 コラム「四円切手のうた」
 ※執筆は片脚の国語教師 浅田修一先生/当時のR郵送料金は4円
 左縦 昭和48年7月 青雲新校舎(現校舎)完成時の生徒会報記事
 右下 昭和61年9月 兵庫通信 連載コーナー「お便りします」
 ※今回は国語の澤井先生へのラブレター風おたより



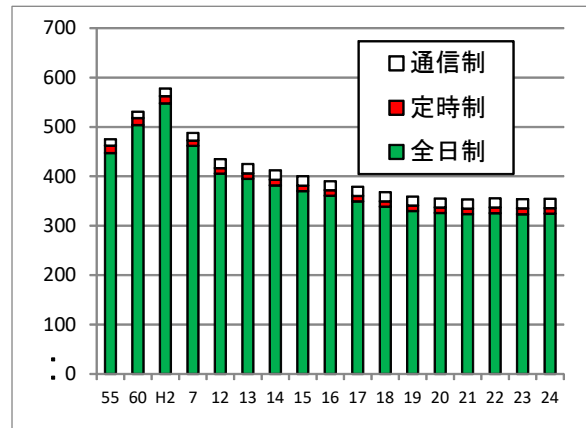
昭和32年 豊岡高校通信教育部閉部式の写真アルバム



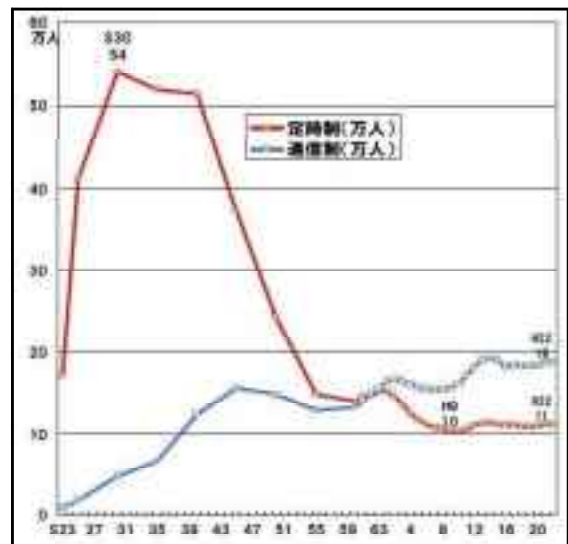
昭和32年頃 長田高校校舎全景

通信制高校に関する全国統計

全高校生 課程別人数(昭和55~平成24年) (単位:万人)



定時制・通信制 生徒数の変化(昭和23~平成22年)



記念特集「青雲50年のあゆみ」

第1章 青雲高校50年史

- 50年史(1) ～概観と前史・創立の時期
- 〃 (2) ～高度経済成長と通信制高校
- 〃 (3) ～年齢層の激変・生徒数の激変
- 〃 (4) ～生徒層の激変

第2章 青雲の現在 ～数字で見る21世紀以降の姿～

第3章 情報化社会のただ中で

～校務支援システム・eラーニングとその周辺について～

第4章 海と山と時を超えて ～協力校・月面クラスについて～

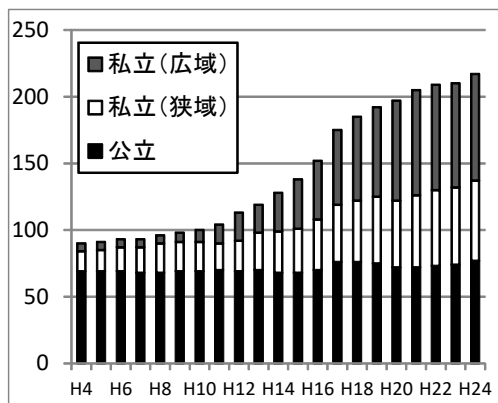


昭和42年頃 生徒スナップ(シェー?)



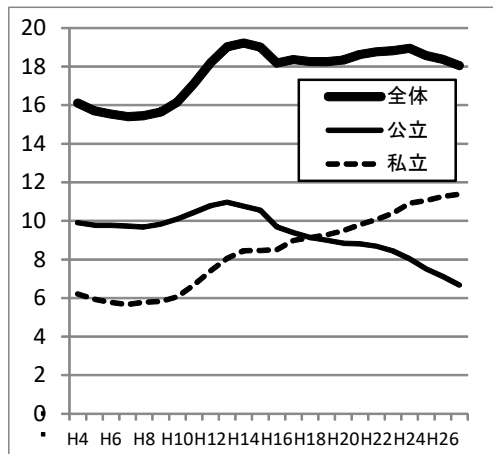
昭和47年頃 スクーリング風景(兵庫通信より)

全国通信制高校数(公私立別) (平成4～24年)



(単位:校)

通信生高校生生徒数(公私立別) (平成4年～27年)



(単位:万人)

※ 統計資料は学校基本調査に基づく

はじめに

50年という歳月は、昔なら一人の人生に匹敵する長さだ。ならばその年月の中で、どれほど多くのドラマが生まれることか、想像するのは難しくないだろう。

ここに掲げたグラフは全国の高校生数と定時制・通信制高校生の生徒数の変化を追ったものである。

今や定時制高校生より通信制高校生の方が多く、私学通信制の生徒数が公立の生徒数を抜いてしまった。50年の間に社会そのものが大きく動いたのがわかる。今も動いている。

続いて次ページ、第1章の最初には青雲高校創立以来の生徒数の変化と生徒平均年齢の変化を示した。資料の関係上、平均年齢の最初は入学生のみである。

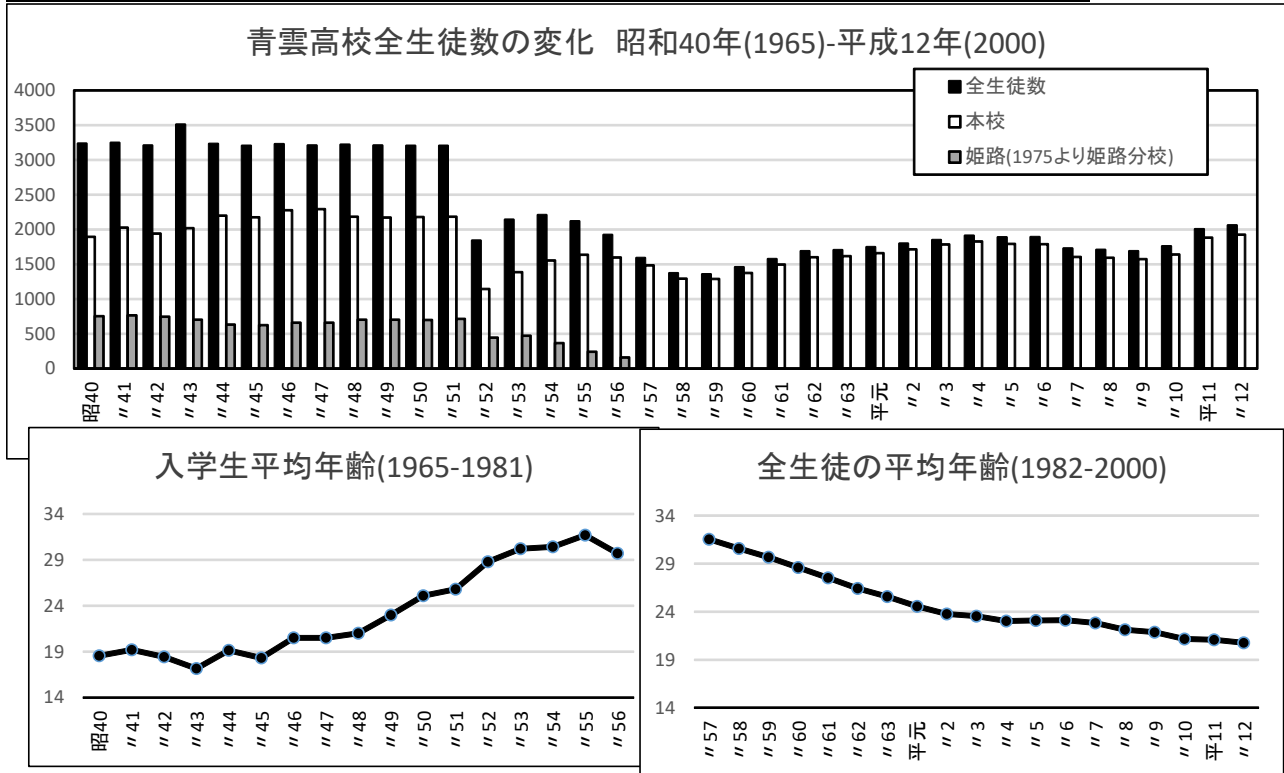
社会が普通に考える高校生世代との大きな違いとか、その変化の様子などを読み取ってもらえるだろうか。生徒数の多さとその動きなども。これだけでも、青雲高校の規模と多彩さ、そしてそれを取り巻く社会の激変ぶりを想像してもらえないのではないかなと思う。

しかし数字だけではない。数字に表れる以上に、さらに複雑な、生きた学校の歩みがある。その内実を50年を機会として、多少でも振り返りたいと私たちは考えた。

通信制高校の歩みとは、社会や政治のあり方に直結した歴史そのものである。

そんな通信制高校という、普通の学校とはちょっと、いや、かなり違う学校のあり方を少しでも明らかにしていきたいと思う。

第1章 青雲高校50年史(1) ～概観と前史・創立の時期



前史/通信制発足から青雲創立まで

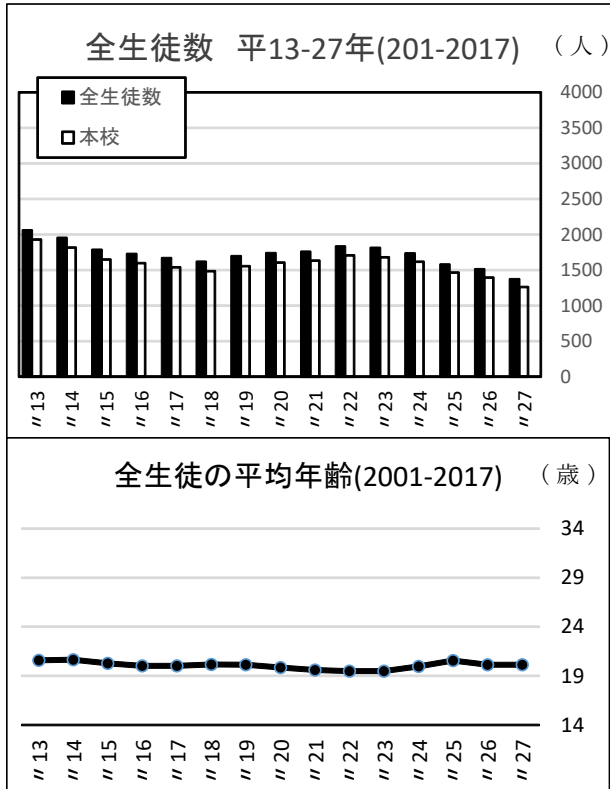
年号(西暦)	事 項
昭和22年 1947	学校教育法公布(45条で通信教育規定)
" 23年 1948	高校通信教育開始(国語甲) 兵庫県立豊岡高等学校と加古川東高等学校に通信教育部開設 (当時は定時制・全日制の補完的存在であった)
" 28年 1953	通信教育科目数21科目に
" 30年 1955	通信教育だけで卒業単位修得(85単位)が可能になる
" 32年 1957	豊岡・加古川東の通信教育部統合のため廃止 兵庫県立長田高等学校に通信教育部設置(定員1800名) 姫路東・洲本実業・社・山崎・香住・八鹿・柏原が協力校に
" 33年 1958	学習グループ(学G)が学習活動開始
" 34年 1959	(クラス制制定)
" 35年 1960	(定員2500名)
" 36年 1961	長田高校40周年記念研究「生徒の学習を促進させ脱落を防ぐには～」 (定員2800名) 学校教育法改正・通信制高校の独立が可能に
" 37年 1962	
" 38年 1963	(定員3200名) NHK学園高等学校開校(最初の広域通信制高校)
" 39年 1964	長田高校通信教育部より「通信教育の概況並びに要望事項」提出
" 40年 1965	兵庫県立長田高等学校通信教育課程廃止 兵庫県立青雲高等学校創設(長田の通信制課程生徒2475名は転入生となる) (姫路東・洲本実業・社・山崎・香住・八鹿・柏原は引き続き協力校に)

創立前後の退学生数(脱落生徒数)

年号	脱落生徒数(人)	うち学習停滞(人)
昭39	744	302
" 40	381	170
" 41	347	247
" 42	566	248
" 43	655	477

学習グループ(学G)とは

ともすれば孤独感に陥りがちな通信制の学習の不安を克服し、助け合って、学習を進めていくために、生徒同士が集まり、学習活動をグループで行っていく活動。
県内の各地に学Gの拠点が置かれたが、次第に衰退した。



通信教育始まる

通信教育は昭和22年の学校教育法の規定に基づき始まった。当初は全日制・定時制の補完的な存在で、一部の科目を通信制で勉強するだけであった。通信教育のみで高校を卒業することは想定されていなかったのである。

後、適用科目が拡大されるとともに、通信制教育のみで当時の高校卒業可能単位数85単位が修得可能になる。(昭和23～43年実施指導要領の卒業単位数。57年実施指導要領で80単位。平成15年度実施指導要領から現行の74単位以上になる)

青雲創立前後の卒業生数の調査を見ると、そこには定通併修による卒業生が数字として入っている。(左表「創立前後の卒業生数」参照)

働きながら学ぶ当時の若者の姿が定時制や通信制の学校にはあったのである。

昭和23年に豊岡高等学校と加古川東高等学校に開設された通信教育部が17年後の青雲の前身である。

昭和32年、前々年の法改正をきっかけとして、現在の長田高等学校内に通信教育部が設置される。

創立前後の卒業生数

(単位:人)

年号	通信教育 のみの卒業	定通併修 (定時制卒業)
昭32	19	37
33	18	72
34	25	56
35	24	135
36	30	166
37	27	112
38	51	126
39	55	142
40	87	143
41	79	139

脱落生徒

しかし当時から、通信制の教育は退学生徒(脱落生徒)の多さに悩まされていた。左ページ下の表は、当時の「脱落生徒」とされた生徒数をまとめたものである。中には通っている定時制高校を卒業あるいは退学したので青雲も除籍になったという生徒もいるが、それでも多い。

いかにして生徒の脱落を防ぐかは創立前からの課題であった。その研究も早くからなされており、昭和36年の長田高校創立40周年記念研究中間報告には、その名もずばり『生徒の学習を促進させ脱落を防ぐにはどのような具体的方策を講ずるとよいか』という研究がある。(左写真参照)



[昭和36年 長田高校創立40周年記念研究中間報告
『生徒の学習を促進させ脱落を防ぐには
どのような具体的方策を講ずるとよいか』]

単独高校設立へ

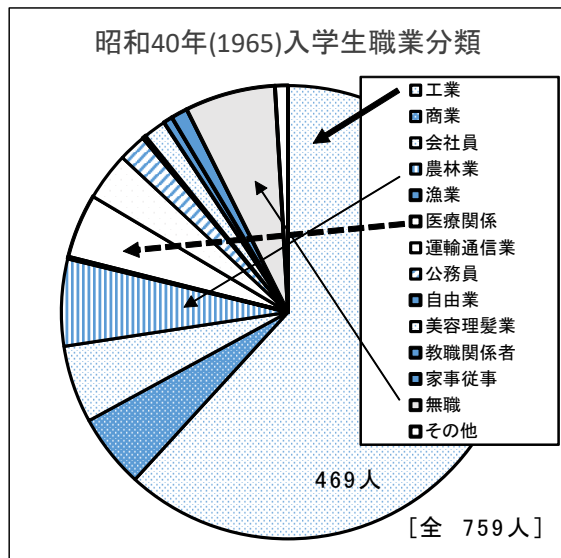
昭和30年の法改正により通信制単独で高校を卒業することが可能になる。昭和36年には単独高校も可能になる。38年に最初の広域通信制高校としてNHK 学園高等学校が開校する。

昭和39年に当時の長田高校通信部は『通信教育の概況並びに要望事項』という書類を提出する。その中で、当時の教員達は通信制課程の独立校設置の必要性を訴える。

「通信教育の指導は、添削指導、面接指導、各種教育活動の指導等・・・特殊性をもっているのので、この教育に専念する校長を置く独立校とし、校長自からの現場に即した指導が教育効果の向上をはかる上に必要と認められる・・・」(同要望「Ⅲ要望事項」より)

そのかいあってか、昭和40年、単独通信制高校として青雲高校が遅いうぶ声を上げるのである。

50年史(2)～高度経済成長と通信制高校(昭和40-50年頃)



全生徒対象 職業分類調査

(単位:人)

職業	昭和41年	昭和42年
工業	1876	1984
商業	220	96
農林業	72	18
漁業	6	1
会社員	191	161
医療関係	63	132
公務員	40	82
運輸通信業	60	126
自由業	11	28
美容理髪業	32	45
鉱業	3	13
その他	55	118
家事従事	81	74
無職	182	111
計	2892	2989

入学生のうち15歳生徒の男女別生徒数と技能連携

(単位:人)

年号	男子	女子	事項(技能連携・併修等)
昭和42年	30	83	兵庫県立城北高等学校女子が併修
“ 43	137	442	川崎製鉄研修所技能訓練センター(5月)・東洋紡績赤穂工場赤穂高等女学院(6月)と技能連携
“ 44	158	92	日本国有鉄道大阪鉄道管理局関西鉄道学園鷹取分所(4月)と技能連携
“ 45 (1970)	219	96	阪急百貨店阪急商業学園・東洋紡績姫路工場姫路高等女学院(3月)神戸市医師会准看護学校(6月)と技能連携、東洋紡績赤穂高等女学院は解除(3月)

生徒出身地調査

(単位:人)

昭和44年 (生徒全体)	昭和45年 (入学生のみ)		
神戸	399	兵庫	339
阪神	249	熊本	42
東播	254	鹿児島	42
西播	366	岡山	41
但馬	195	大阪	20
丹有	83	島根	19
淡路	87	山口	19
近畿	225	宮崎	17
中国	411	大分	14
四国	123	千葉	14
九州	552	福岡	13
		長崎	13
		香川	12
		愛媛	11
その他	147	その他	48
計	3091	計	664

入学生職業分類

(単位:人)

職業	昭44	職業	昭45
専門的・技術的	65	技能工・生産工	398
事務	22	事務	29
販売	77	販売	36
農林漁業採鉱採石	3		
運輸通信	235	運輸交通	44
技能工・生産工	370		
単純労働	8		
保安	3	看護	71
サービス	58	理容・美容	17
その他	11	その他	28
無職(主婦含む)	17	家事	20
		無職	21
計	869	計	664

技能連携制度とは

通信制または定時制課程の生徒が、教育委員会の指定する技能教育のための施設(指定技能教育施設)で教育を受けた場合、その施設で受けた学習を高等学校の教科の一部の履修とみなすことができる制度のこと。

この頃、青雲は企業内に設けられた学校(企業内学校)の学習を認定しており、その学習の場にも出向いていた。

高度経済成長の落とし子

通信制高校は、当初から社会の要請を受けて始まったものである。いわば高度経済成長の落とし子と言えるだろう。

生徒の様相は年ごとに激変する。

当時は、中学卒業生徒が「金の卵」と呼ばれた時代（～1965年頃まで）で、まだ高校への進学率は高くなかった。高校進学を断念し、就職した生徒にとって、定時制や通信制は働きながら学ぶ高校であった。

定通の存在は必ずしも中卒生徒を雇う企業論理と矛盾するものではなかった。企業自身が雇用時に高卒資格も取れる職場であることを謳うため、通信制高校などと連携することが多く行われた。

そのため、当時の青雲の教育課程は企業内で学ぶ工業系や商業系、また家庭系の科目が設定されている。一方、高度経済成長の裏返しで、農業などの衰退はすでに始まっていた。創立当初は一定数在籍していた第一次産業従事者の入学はすぐに少なくなる。

技能連携、その他さまざまな生徒層

当時の青雲には技能連携校の生徒や、高卒資格を求める中卒生徒が多く入学した。

集団就職で関西にやってきた少年少女が働きながら通信制高校で学ぶ。多くは工業・商業系の仕事。その他、多彩な職業の生徒が全国各地からやっていた。（左グラフ・表等参照）

中卒で入る公務員とは自衛隊隊員や公社社員の分類項目である。美容理髪関係の生徒も多く、彼ら彼女らの休日に合わせた月曜クラスは昭和41年に設置されている。

各年ごとに入学する生徒の男女比さえも激変する。昭和43年の入学生のうち、15歳の生徒で女子が急増している。これは東洋紡に就職した女子生徒であろうか。（左中表参照）

中卒で入れる准看護学校などの生徒が上を目指すのだろう、看護婦（看護師）の数も多い。

運輸通信業のうち旧国鉄に勤める生徒は昭和44年には技能連携の形を取るようになる。

青雲高校とは時代を反映する高校であったのだろうか？ そうとも言えるかもしれないし、そうではないとも言える。むしろ、時代に翻弄される高校であるのかもしれない。

昭和46年には実学習者1992名中1006名が集団生・技能連携生であるという証言もある。（当時勤務の田崎純爾教諭の昭和55年8月発表の文章より）

専用校舎完成

昭和48年には専用校舎が完成し、50年にエレベーターも設置される。

当時の長田高校生などは、戦前に建てられた長田高校旧校舎の隣に立つ、4階建ての新しい校舎を不思議そうに見ていたと言う。

昭和50年には姫路方面を管轄する姫路分校が設置され、専用の校舎も準備される。

だが、姫路分校は、数年で廃校が決定し、56年度末には終焉を迎えることになる。



[昭和47年頃 スクーリング風景・東洋紡クラスか]

私の高校への道程

（生徒寄稿文）

～昭和47年度「兵庫通信」卒業記念号より

50年史(3)

～年齢層の激変・生徒数の激変・青雲の姿が変わる

転機の頃

昭和52年の学校要覧にはそこまでの数年の入学生徒の平均年齢が急速に高齢化していることが、書かれている。(50年史(1)概観のグラフ参照)

この後も高齢化が続くようである。推定値であるが、全生徒数の平均年齢推定のグラフをつなげると、変化がよくわかる。

あきらかに青雲を取り巻く世の中の状況は変化しつつあった。青雲の役割も大きく変化しつつあったのだ。

昭和52年は転機の年である。

詳細は不明であるが、この年、青雲の生徒数は激減する。昭和51年に比べ、1400人も公称生徒数が減っている。

技能連携をしていた企業内学校等が終わる時期であるのも一因かもしれないが、これのみ原因とも思われない。(右ページ表参照)

併修制度が廃止になったのもこの年の3月だが、併修生の数自体も微々たるものだ。

伝聞情報であるが、不活動生の大量の除籍が行われたということである。それでも定員は3200名を保った。

混乱

一方で入学者数の増加もあった。

当時の職員の残した文章によると、学習生徒が実質「280名の増加」という。クラス編成の予想を大きく上まわる数字だった。

確かに昭和51年のクラス編成を見ると1～4年までで6, 5, 4, 4の編成となる。しかし昭和52年は10, 5, 4, 4のクラス編成。(これ以外に協力校や月面クラスがある。)

詳細は不明な部分が多いが、この時期青雲は相当混乱していたようである。学園紛争のなごりをひきずる時代でもある。青雲高校教職員にも懲戒免職者などが出ている。(該当職員は後、処分取り消しで復職する)

時代の変転とともに大きく生徒の質も変わり、学習の姿も変わったのだろう。

NHK 学習書を使用するようになるのも昭和52年からである。現在もそれ以前に使っていた、青雲オリジナルの教材が教材倉庫に残されている。



【昭和50年度版 青雲オリジナルの学習書】

県内のもう一つの通信制高校

昭和54年に網干高校が開設される。県下で通信制課程を持つ、もう一つの高校が生まれたのである。

姫路分校が消え、さらに400人程度の生徒数が減る。しかし定員は分校の200名が減らされたのみで、青雲は依然総定員3000名の大規模校であった。

その頃、青雲は比較的、年齢層の高い生徒たちの学習の場となった。



【昭和60年 体育大会のチアリーディング?】

生徒平均年齢と国内失業率

一興だが、この時期の失業率及び高校進学率と青雲入学生の平均年齢を重ねてみるとこんなことが言えるように思う。(右ページ下グラフ参照)

高度経済成長が終わり、不況の到来とともに青雲の平均年齢は上がる。

この二つの事項に相関関係を見いだすのは不自然だろう。

時代の不安定化とともに、高卒資格を求める、団塊あたりの中卒者が学歴を求め始める。

また、その前の時代、低かった高校進学率。特に女子の進学率は低かった。時代は高校進学を当たり前のもと見なすようになってくる。

男子女子ともに先の時代を埋め合わせるように、あるいは先行き不安な時代の突破口を求めるように青雲に入学してくる生徒が増える。これが高齢化の理由だったのかもしれない。

生徒年齢の若齢化

不況が過ぎるころ、青雲の平均年齢は再び若齢化し始める。

その後、何度かの不況の時期やバブルの時期を迎えたが、特に若齢化傾向の変化は見られない。

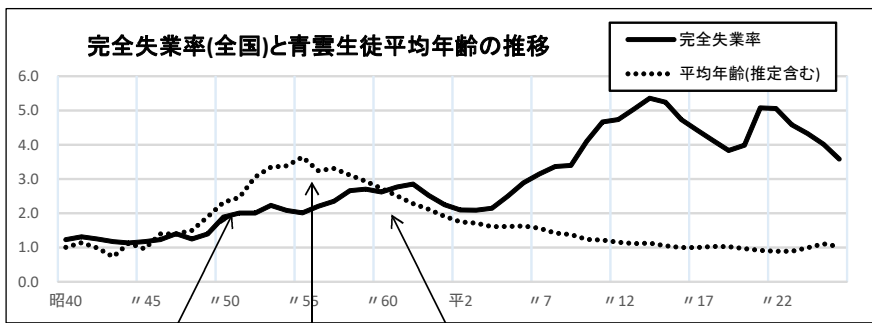
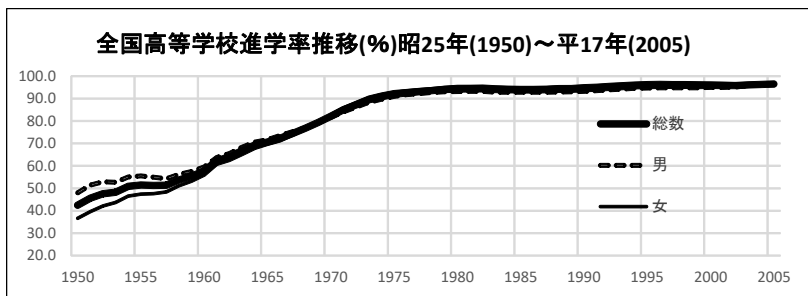
時代はすでに高校全入に近い時代を積み重ね、青雲を必要とする層は少なくなっていたのだろう。

生徒数・卒業者数・平均年齢の変化

(単位：生徒数＝人／平均年齢＝歳)

年号	生徒数	卒業者数	平均年齢	事項	
昭40	1965	3234	87	18.5	平均年齢は入学生(推定値)
〃 41	1966	3244	79	19.2	〃 月曜クラス設置 東洋紡(明石・姫路・赤穂)クラスなども
〃 42	1967	3206	233	18.4	〃 学習グループは県下で21グループが活動
〃 43	1968	3509	167	17.2	〃 1～3年まで10組は川鉄クラス
〃 44	1969	3230	201	19.1	〃 阪急(一般・集団)クラスや国鉄クラスなども 高校紛争全国化
〃 45	1970	3201	293	18.3	〃
〃 46	1971	3228	318	20.5	〃 (学校要覧より)
〃 47	1972	3208	231	20.5	〃
〃 48	1973	3218	298	21.0	〃 オイルショック 専用校舎完成
〃 49	1974	3205	261	23.0	〃 高度経済成長が終わり、重厚長大産業が 衰退始める
〃 50	1975	3203	165	25.1	〃 姫路分校開設 川崎製鉄訓練センター閉校
〃 51	1976	3204	173	25.8	〃 東洋紡高等女学院閉校
〃 52	1977	1838	184	28.8	〃 生徒数激減 併修制廃止 (定員3200名：本校2400名、分校800名)
〃 53	1978	2142	241	30.2	〃 (推定値)
〃 54	1979	2208	291	30.4	〃 神戸市准看護婦学校閉校 共通一次試験開始・網干高校開校 (定員3000名：本校2400名、分校600名)
〃 55	1980	2117	425	31.7	〃
〃 56	1981	1922	328	29.7	〃
〃 57	1982	1589	328	31.5	全生徒(推定値) 姫路分校と協力校廃校 (定員2400名)
〃 58	1983	1369	267	30.6	〃
〃 59	1984	1356	235	29.7	〃
〃 60	1985	1456	248	28.6	〃

(閉校情報…法庫.COM『技能教育のための施設として指定した件』)



(進学率・失業率…統計局統計より)

中高年の学習者多し

生徒年齢の高齢化始まる

若齢化進む

写真右上 青雲通信の前身「兵庫通信」昭和48年5月号 ↗
 右下 [姫路分校発行の「分校通信」昭和55年6月号] →
 (分校通信の校舎は当時の姫路東高等学校内)

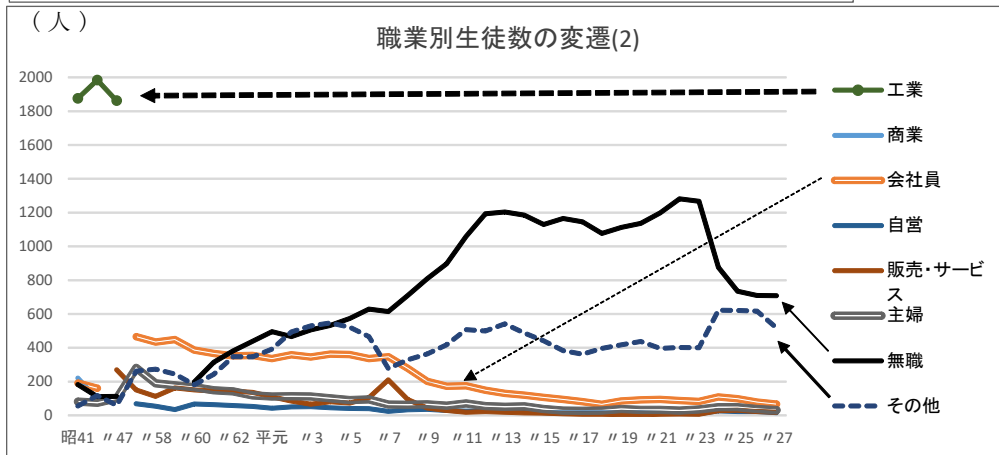
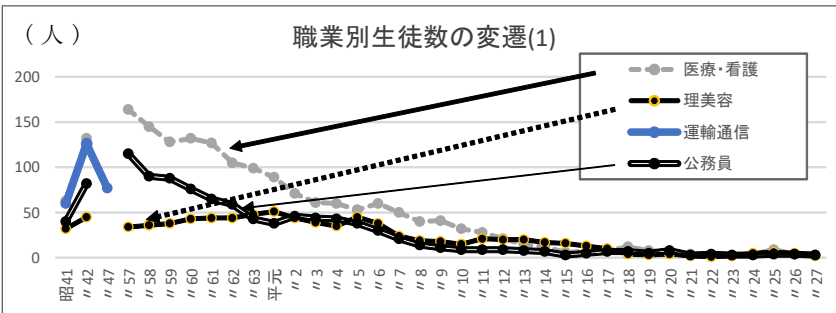


50年史(4)～生徒層の激変・青雲の姿が変わる

生徒数・卒業者数・平均年齢の変化

(単位: 生徒数 = 人 / 平均年齢 = 歳)

年号	生徒数	卒業者数	平均年齢	事項
昭61	1986	225	27.5	スクーリング回数を18回から16回に。
// 62	1987	266	26.4	学Gは39回設定
// 63	1988	269	25.6	学Gは36回設定
平元	1989	283	24.6	学Gは33回設定
// 2	1990	279	23.8	
// 3	1991	294	23.6	
// 4	1992	319	23.0	長田商業との定通併修はじまる
// 5	1993	301	23.1	
// 6	1994	368	23.1	指導要領改正実施(家庭科男女必修、地歴・公民など) 在籍期間8年・同一学年3年までとする
// 7	1995	291	22.8	1月、阪神淡路大震災
// 8	1996	340	22.1	
// 9	1997	355	21.9	
// 10	1998	324	21.2	明石海峡大橋開通(4月) 学年制から単位制に 在籍期間変更(三年条項) (定員2200名)
// 11	1999	2005	21.1	
// 12	2000	2058	20.8	行事見直し(体育祭休止・一泊研修終了)
// 13	2001	2059	20.6	学習グループ廃止 文化祭をふれあい祭として長田商業と共催
// 14	2002	1955	20.7	卒業単位を80単位から74単位に変更 神出学園との連携協定 「兵庫通信」を改題、「青雲通信」に(416号から)
// 15	2003	1786	20.3	指導要領改正実施(総合的な学習・情報など新設) 大学入試資格の緩和(施行規則150の7)
// 16	2004	1729	20.0	研究校指定・第1次HP開設
// 17	2005	1669	20.0	
// 18	2006	1617	20.2	
// 19	2007	1698	20.1	
// 20	2008	1739	19.9	
// 21	2009	1758	19.6	SEIUN WEB SCHOOL開設・第2次HP開設
// 22	2010	1833	19.5	授業料無償化制度始まる(平成25年まで)
// 23	2011	1815	19.5	3月、東日本大震災
// 24	2012	1734	20.0	ふれあい祭で仙台第一高校(現 美田園高校)支援
// 25	2013	1578	20.5	指導要領改正(数学・理科の先行実施)
// 26	2014	1511	20.1	神出学園との連携協定拡充(教科「体験」最大20単位へ) 就学支援金制度始まる
// 27	2015	1372	20.1	森の学校との連携へ



※ H21以降は「その他」の分類を「その他・バイト」と変更。それ以前の「無職」層が「その他・バイト」に流れ込んだために「無職」が減り、「その他」が増加した可能性が考えられる。

明るい学校

なんだか悲壮な話になってしまった。

しかし現実はいささか違う。この時代をいきいきと生きた生徒や教員は多い。たとえば右に紹介する文章などはそうであろう。

また、今回過去の写真を発掘していて、この時代の写真を見たある先生がつぶやいた。「いいな、わたしこんな学校に勤めたかった」

若い頃、できなかった勉強を、楽しみながら取り戻そうとする生徒たちで、青雲はこじんまりとした活気に満ちていた。

終焉から次世代の萌芽が

終焉は次の誕生でもある。青雲はさまざまに変わっていく。

昭和54年の共通一次試験の導入以後、受験競争は激化していき、長田高校からの要請もあり、3校併置の校舎を使うスクーリング回数は減らさざるを得なくなった。

昭和60年以前は18回のスクーリングが実施されていた。さらにその以前は、年間24回のスクーリング実施の時期もあったが、時代の波にあらがうことはできなかった。昭和61年に年間のスクーリング回数が16回になる。この後、スクーリング必要時数なども県と確認を取りつつ再検討されていく。

スクーリング回数減少分を埋めるべく、学習グループなどの活動振興に当時の教師たちは乗り出すが、時代は思うようには動かない。

昭和61年に年間39回を数えた学習グループの活動も、参加生徒数の減少から平成13年にはなくなった。

時代の変遷で表舞台から消えていくものはその他にも数多い。

看護婦(看護師)や、公務員(自衛隊員等)、理髪業の生徒の数は激減するが、統計上は残り続けている。

平成15年の大学入学資格の緩和から、朝鮮高級学校の卒業生が入学することはなくなった。平成11年には8人入学。以後1, 4, 2, 1人。その後、途絶える。

だが教師用の入試受付要領には、朝高や高等看護学校卒業生が編入してくる場合の修得単位のみなし規定がまだ息づいている。

将来にも多様な生徒を受け入れる可能性のある青雲にとって、過去のルールは何らかの形で伝承せざるを得ないのである。



[平成12年 修学旅行]

私にとって通信制高校とは

(生徒原稿 略)

～昭和63年7月『兵庫通信』
[昭和62年「私の主張」
日本放送協会会長賞受賞]

二つの震災

平成7年(1995年)1月、阪神淡路大震災が起こる。青雲の被害も大きく、当時の混乱は多くの記録に残っている。この年の卒業生は前年に比べて多めである。(平成6年度卒業生数参照) 混乱の中で卒業した生徒も多かったのだろう。

被災支援も数多くあったが、その中に宮城県仙台市の通信制高校(仙台第一高等学校 現在は美田園高等学校)があった。

この時には16年後の東日本大震災を予測するものは誰もなかった。奇しき因縁が平成23年のふれあい祭での支援活動として結実する。

震災後、生徒数は底を打ち、再び上昇し、2000名を超える。震災と生徒数上昇の関係については不明であるが、なんらかの関連があるかもしれない。

(生徒 ポスター 略)

[平成23年 東北支援のふれあい祭「日本を元気に」
ポスター原画 平成24年度卒業生 () さん 画]

新たな半世紀へ

一方、時代の要請から青雲にはまた別の取り組みが必要となってくる。

学習指導要領は数度の改定を経て、その度ごとに旧課程生徒を多く抱える青雲は苦闘する。

平成10年には単位制高校になる。その時にも激論はあったが、単位制の考え方は通信制と馴染みやすかったようである。レポート提出方法が変更され、容易な方法でのレポート提出ができるようになったり、在籍有効期間の変更が行われる。いわゆる三年条項が確立するのがこの年である。(三年条項については第2章参照)

平成14年に卒業単位数が74単位になる。総合的な学習や教科・情報の導入は平成15年からである。

時代はすでに情報化社会まっただなかとなる。

平成16年に青雲は研究校の指定を受け、マイクロソフトの支援を受けるが、この研究は思ったようには進まなかった。青雲はすでに21世紀最初の頃から IT を存分に駆使する環境を整えつつあったが、その技術と通信制教育そのものを親和させることについては懐疑を示したのである。(校務支援を中心とする IT 環境については後述する。)

通信制高校を支える社会の根幹が IT 技術の進化によって変容しつつある。しかし青雲はまだその、充分な活用には至らず、模索中であると言えない。

また、生徒の若年齢化は明らかであり、職業分類で無職の生徒・中学からの不登校の生徒などが数多くを占めるようになってくる。特別支援が必要な生徒の存在など、時代は青雲にさらなる変革を要請してくるのかもしれない。

平成26年に拡充された神出学園との連携協定、さらに来年度から実施される山の学校との連携などにその方向が端的に現れているのかもしれない。

震災がつないだもの

～被災地高校へのメッセージ～

宮城県仙台第一高等学校(通信制)
生徒ならびに教職員の皆様へ

(生徒文章 略)

～当時の生徒会のメッセージ～

第2章 青雲の現在 ～数字で見る21世紀以降の姿～

第1章では、50年に及ぶ青雲の歩みを駆け足で見てきた。次に目を転じて、現在の青雲の姿を見てみよう。通信制高校の生徒の姿は多彩である。登校する生徒の姿を見ると、制服がないから服装はバラバラである。髪の毛の色もさまざまだし、年齢層も幅広いため、街中を歩いているのと同様ないようにさえ思える。比較的、若者層が多いのは事実だ。ここでは21世紀に入ってからの青雲生の実像を、数字を迫りつつ迫ってみたい。

[表1] 入学生のうち新入生比率と年齢

入学年 (西暦)	全入学生数 (人)	新入生 (%)	新年卒 (%)	新入生 平均年齢 (歳)
平13年(2001)	786	55.0%	45.8%	19.3
平14年(2002)	661	61.0%	50.9%	18.6
平15年(2003)	662	63.3%	42.5%	19.0
平16年(2004)	648	58.6%	50.5%	18.1
平17年(2005)	598	59.7%	49.9%	18.2
平18年(2006)	583	59.2%	49.3%	18.4
平19年(2007)	712	58.8%	43.0%	18.6
平20年(2008)	673	54.8%	52.6%	17.6
平21年(2009)	667	61.3%	54.0%	17.0
平22年(2010)	661	68.1%	58.7%	17.4
平23年(2011)	570	64.0%	47.9%	18.6
平24年(2012)	554	65.7%	54.1%	18.8
平25年(2013)	512	67.8%	51.0%	19.0
平26年(2014)	502	65.3%	56.4%	17.8
平27年(2015)	427	69.1%	59.3%	18.2

若齢化傾向

最初に掲げるのは入学生の生徒数と、そのうち新入生、さらに中学卒業すぐの生徒(新年卒)が増えていることを示す表である。全入学生に新入生の%をかけ、さらに新年卒の%をかけると中卒すぐの実人数が出てくる。平均年齢も加えてみた。

入学人数そのものとはともかく、中学卒業直後の生徒(14・15歳)の入学の割合は確かに増えている。

若い生徒が多くなったと昔を知る教員は言う。だが、それはけっして青雲にとって喜ばしいことかどうかは難しいところである。なぜなら比較的若い生徒の卒業率は芳しくないからである。

[表2] 年代別卒業率

年代	卒業 (人)	生徒数 (人)	卒業率 (%)
14-19歳	3819	7780	49%
20-24歳	451	820	55%
25-29歳	249	411	61%
30-34歳	145	237	61%
35-39歳	100	150	67%
40-44歳	49	74	66%
45-49歳	35	53	66%
50-54歳	36	47	77%
55-59歳	29	35	83%
60歳以上	35	55	64%

上の世代のがんばり

表2は出願時の年代別で、生徒の卒業生数と卒業率を示したものである。2000年ころからのコンピュータで追えるデータでの統計である。さらに詳しく見ると、出願年齢15歳の生徒の卒業率は41%にまで落ち込む。

若年世代の問題と対照的に勉学に励む上の世代は目につきやすい。年代が上がるほど、卒業を果たす生徒の割合は多くなる。過ぎ去ったものを追う生徒ほど、ひたむきなものが多いのだろうか。その姿が現役生徒世代を刺激することも多い。

[表3] 卒業までかかった年数(卒業生中、新入生のみ調査)

年度年度	3年 卒業	4年 卒業	5年 卒業	6年 卒業	7年 卒業	8年 以上	新入 卒業 生数	全卒業 生数
平13年(2001)	35.6%	49.6%	7.4%	3.0%	1.5%	3.0%	135	356
平14年(2002)	50.0%	35.2%	8.6%	4.8%	1.0%	0.5%	210	426
平15年(2003)	52.0%	33.2%	9.4%	4.0%	0.5%	1.0%	202	391
平16年(2004)	48.5%	33.8%	8.5%	4.6%	1.5%	3.1%	130	285
平17年(2005)	52.2%	31.1%	10.0%	3.3%	1.1%	2.2%	180	334
平18年(2006)	37.1%	37.9%	15.7%	5.7%	0.7%	2.9%	140	269
平19年(2007)	51.0%	30.2%	10.1%	5.4%	0.7%	2.7%	149	300
平20年(2008)	50.0%	27.0%	11.5%	4.7%	4.7%	2.0%	148	304
平21年(2009)	54.7%	29.2%	7.5%	4.3%	3.1%	1.2%	161	306
平22年(2010)	47.9%	33.3%	7.6%	2.8%	2.1%	6.3%	144	304
平23年(2011)	53.9%	29.6%	9.2%	3.9%	2.0%	1.3%	152	309
平24年(2012)	51.8%	30.5%	9.1%	3.6%	3.0%	2.0%	197	321
平25年(2013)	52.4%	31.8%	8.2%	3.5%	2.4%	1.8%	170	287
平26年(2014)	50.6%	26.0%	10.4%	5.2%	4.5%	3.2%	154	278

卒業年数

青雲生徒の勉学の様子をもう少し細部まで見てみる。単位制で、在籍期限のない青雲高校では、卒業するのに、何年も費やすケースが当たり前になっている。左の表は、それぞれの年度で卒業生が何年かかって青雲を卒業したかをまとめたものである。

(ここでは青雲の勉強だけで卒業にこぎつけた、「新入生」の数字である)

青雲の教育課程は4年で卒業を標準としているが、最近では中卒後3年で卒業する生徒が一番多くなっている。しかし、5年以上をかけて卒業する者も多い。

そして勉学がうまくいかず、中途退学に至るケースも多数ある。

[表4] 学習生徒の単位修得数（全学習生徒に対する％）

年度	0単位	1-5単位	6-10単位	11-20単位	21-30単位	31単位以上
平13年(2001)	36.1%	8.0%	4.2%	15.5%	31.0%	5.3%
平14年(2002)	36.4%	8.8%	4.1%	19.2%	27.2%	4.4%
平15年(2003)	35.3%	9.6%	5.7%	24.0%	22.3%	3.0%
平16年(2004)	37.6%	10.8%	4.3%	21.4%	23.3%	2.7%
平17年(2005)	36.2%	10.7%	5.2%	20.3%	23.9%	3.6%
平18年(2006)	35.9%	12.0%	5.1%	16.5%	26.5%	3.9%
平19年(2007)	35.1%	11.6%	5.2%	14.7%	30.0%	3.5%
平20年(2008)	36.6%	10.5%	5.2%	15.2%	29.7%	2.6%
平21年(2009)	34.7%	10.6%	6.3%	16.6%	29.3%	2.4%
平22年(2010)	33.1%	12.3%	5.6%	15.8%	29.8%	3.5%
平23年(2011)	35.4%	10.9%	5.6%	15.4%	29.7%	3.1%
平24年(2012)	35.7%	11.3%	4.9%	15.2%	27.7%	5.0%
平25年(2013)	34.0%	9.9%	7.7%	12.2%	31.8%	3.9%
平26年(2014)	33.9%	9.7%	5.5%	13.0%	33.4%	3.2%

単位修得率

最近の単位修得率をあげて見よう。青雲では1年間で最大34単位の単位が修得可能となっている。これは全日制で言えば、土日が休みになる以前の高校で取れる標準的な単位数である。その気になれば2年とちょっとで高校卒業に必要な74単位を修得することは計算上可能である。

しかし実際の修得状況は左の通りで、1年間に全く単位修得のない生徒も多い。

「自学自習」が青雲の学習の基本であるが、その意味は実は大きく重い。教職員は少しでも単位を取って卒業に生徒を近づけようと努力はしているが、その遅々たる歩みは、少しはこの表に現れていると見ていただけるだろうか。

[表5] 前後期取得T資格数対照表①

(平成25年度 1年次) (単位:人)

後期→	8科目	7科目	6科目	5科目	4科目	3科目	2科目	1科目	0科目
前期↓	129	7	4	2	3	2	1	2	19
8科目		4	3	1	1		1	1	2
7科目			1						2
6科目		1						2	1
5科目					1		1	1	4
4科目							1	1	6
3科目		2			2		1	1	1
2科目			1		1		1	2	6
1科目				1	1	1	1		9
0科目							3	2	112

前後期T資格取得数

次に特徴ある統計を出してみよう。

青雲では前後期2回のテストがあるが、テストを受けるためには一定の勉強（指定回数のレポート合格・指定回数のスクーリング出席）をこなさなければならない。テストを受けられる資格をT資格という。

前期・後期でそれぞれ何科目のT資格が取れたかを縦横でまとめたのが次の前後期取得T資格数対照表①～④である。

左上に行くほど学習は順調であり、右下はほとんど学習の進んでいない状態である。

[1年次について]

1年次の前後期T資格取得数対比の分布は特徴的である。

まず目につくのが科目数の相関関係があまりなく、表の左上と右下に極端に2分化されている状況である。これは1年次の勉強では、T資格が前期とれる生徒は後期もとれる、最初からとれない(あるいはとろうとしない)生徒はそのまま後期に入っても勉強を始めようとするという、両極端の生徒の存在を意味する。

前期はT資格をとれなかったが後期に入って頑張り直すとする生徒も多少いる。後期に取れるT資格数は前期にさぼってしまった場合最大4科目になるので、左下に現れた4科目のV字型のゾーンはそういう生徒を意味するのだろう。

また特徴的だが、1年次だけに現れるゾーンとして右上の集団(点線)がある。これは前期にほぼすべてのT資格を取ったが、後期には全くT資格取得に至らなかったというケースである。

このゾーンについては少し説明が必要になる。青雲では前期・後期のみで単位修得できる科目以外に年間を通じて単位修得に至る科目として通年科目というものがあり、この通年科目では前期の段階では出席については問わない。前期では出席がなくともテストを受験でき、後期のテストの段階で出席が問われるのだ。

家庭でのレポートはまじめに取り組み、前期のT資格をほぼすべて修得する。しかし後期になって、いざ出席が問われる段階になり、どうしても出席が満たせない生徒は(わずか年間20日程度の出席なのだが)、いくらレポート成績がよくとも単位修得に至らない。



三年条項とは

これは3年間、単位の修得がなかった生徒にいったん学校を退いてもらうという青雲独特の制度である。6年や8年という最長在籍期間を区切らない青雲は、その気になれば、少しずつ単位を取り、何年も在籍できる学校である。だが、勉強をしないまま籍を残し続けるのは意味がない。3年間、単位修得がないという事実について青雲高校は、その生徒がまだ勉学に向かう環境が整わなかったのだと見る。だからいったん学校をやめても、環境さえ整えば再入学は簡単である。

この制度が刺激となって、再入学後に卒業にたどり着く生徒は数多くいる。

[2年次について]

2年次になると登録科目数そのものが生徒によって変わってくるので、いくらか両極端の傾向は薄まる。学習内容の難易度も上がるため、相関関係が表れてくる。それでも両極端に分かれる傾向はそのままである。

青雲は単位制・年次制の学校なので、1年次で全く単位を取らなくとも、2年次、3年次と年次は上がっていく。

2年次の全くT資格を取らない生徒層の多くは1年次でも同様であった生徒達である。

[3年次について]

3年次になると科目数の多いゾーンで相関関係が見えてくる。卒業に向けて拍車のかかる生徒が出てくる一方、なまじっか少しばかりのT資格を取ろうとする生徒は少なくなってくる。(点線部) 青雲高校での勉強に見切りをつけようとする生徒もはっきりしてくる。その頃、三年条項という本校独特の規則が意味を持ってくる。(三年条項については左ページ下欄参照)

[4年次について]

4年次はより広く、T資格取得の相関関係が見えてくる。自分のペースを見つけ、卒業までの道のはっきりさせ、ゆるやかな科目修得のペースを目指すものも多くなる。

4年以上の在籍生徒はすべて4年次に入る。10年以上の在籍生徒は片手以上の人数になる。

以上、青雲の1～4年次までの勉学の実態を見てきた。

中学時不登校経験生徒

前節で気になるのが1年次の右上ゾーンの生徒の存在である。青雲には小中で不登校を経験した多くの生徒が入学する。

最近から統計に残し始めたデータであるが、実際、中学から送られてくる調査書に残る欠席のデータはさまざま。 (表9)

[表6]前後期取得T資格数対照表② (平成25年度 2年次)

後期→ 前期↓	13科目	12科目	11科目	10科目	9科目	8科目	7科目	6科目	5科目	4科目	3科目	2科目	1科目	0科目
13科目			2			1								
12科目		2			2									1
11科目	1		13	1	2	1		3	1				1	
10科目			16	22	6									2
9科目			1	11	8	3	1		1		1		1	
8科目				2		10	3	2	1		1			2
7科目					1	5	7	9	1		1	1	1	2
6科目							1	2	1	2	1	1	2	2
5科目								1	2			1		4
4科目									1		2		1	6
3科目				1			1					2	2	2
2科目					1	2					2		3	2
1科目									1	1	1			3
0科目									1	3	2			112

[表7]前後期取得T資格数対照表③ (平成25年度 3年次)

後期→ 前期↓	13科目	12科目	11科目	10科目	9科目	8科目	7科目	6科目	5科目	4科目	3科目	2科目	1科目	0科目
14科目					1	1								
13科目				1	5	1	3							1
12科目				5	2	3	9	3		1				
11科目				2	10	17	8	5	3					2
10科目					5	19	19	7	4	3		1		2
9科目						7	9	13	3		1		1	4
8科目				2	1	1	5	4	2	1		1		3
7科目					1		1	8	1	2				1
6科目								2	1					4
5科目										1	1		1	2
4科目							1	1						3
3科目										1	2		1	
2科目									1					6
1科目													1	9
0科目											2	2		80

[表8]前後期取得T資格数対照表④ (平成25年度 4年次)

後期→ 前期↓	13科目	12科目	11科目	10科目	9科目	8科目	7科目	6科目	5科目	4科目	3科目	2科目	1科目	0科目
16科目									1					
15科目							1							
14科目							1							
13科目					1									
12科目				1	1	1	2	1	2					
11科目				5	6	3	3	3	1		1			
10科目				1	4	2	5	4	4	1	1	1	1	2
9科目				3	2	11	8	4	3	3	1	1	2	2
8科目				2	2	1	10	4	5	4	1	1		4
7科目					2		8	5	10	3		2		4
6科目								3	5	3	5	2		2
5科目						1		1	6	9	4	2	3	1
4科目							1		2	4	7		2	4
3科目									1	4	7	10		7
2科目									1	2	3	6	3	11
1科目											3	5	8	12
0科目											2	5	5	170

[表9] 中学欠席日数

(単位:人)

入学年	0 -	30-	100-	200-	300-	400	データ数	新入生数
	29日	99日	199日	299日	399日	日-		
平22年(2010)	129	76	60	44	37	45	391	450
平23年(2011)	104	66	55	29	29	27	310	365
平24年(2012)	60	55	34	28	33	43	253	364
平25年(2013)	76	62	52	36	31	33	290	347
平26年(2014)	74	65	59	43	19	34	294	328
平27年(2015)	53	42	43	43	30	27	238	295

不登校経験者・有前籍生徒の再チャレンジ

ここからいわゆる不登校生や他校を経験した後、青雲へ入学した生徒達の姿を見ていこう。

不登校経験生徒達も青雲高校の枠組みの中で高校卒業を目指していく。平成22年度入学生はまだ、本校4年次に多く在籍しているが、卒業したのも退学したのも多い。しかし中学欠席日数と卒業率を見てみると、欠席が多かったからと言って、卒業ができないわけではないことがわかる。むしろ青雲の中では中学校の欠席日数はあまり卒業とは関係ないのではないかと思う。(表10)

[表10]平成22年(2010)新入生
中学欠席日数と現在の状況(27年7月現在)

欠席日数	人数	学習中	休学中	卒業	退学	転出
30-99日	76	3		28	43	2
100-199日	60	3	1	21	35	
200-299日	44	2		20	21	1
300-399日	37	4		15	17	1
400-499日	30	1		8	18	3
500日-	15	1		9	5	

青雲は確かに生徒にとっては大事な学校なのである。この学校にしかないものが確かにあり、この学校を必要とする生徒は存在する。(もちろんこの学校にないものはたくさんあるが…)

また現在籍の転編入生徒のうち、以前に通っていた高校について聞いてみると、実は青雲在籍だった生徒が一番多い。(表11・12参照)表11は現在在籍中の生徒で調べた人数、表12は主に2000年頃からの生徒について調べた人数だが、一度は青雲に通っていて、退学し、再び青雲に戻る生徒がダントツで多い。(表12の2位は某私立高校で116名である。)そして二度目ともなると卒業率も格段に高くなる。(ちなみに表11のM高校の卒業率は35.6%、H高校は40.8%、N高校は48.9%である)

[表11]前籍校人数 (単位:人)

(27年7月現在)	
1 青雲高校	26
2 M高校	23
3 H高校	20
4 N高校	20

[表12]前籍校別卒業率

高校名	再入学(人)	卒業率
青雲高校	304	60.07%



家族でつながる

[表13]家族が青雲生
である生徒数(単位:人)

家族で青雲 入学	総 数	最 初	2 人 目 以 降
平13年(2001)	81	55	26
平14年(2002)	73	47	26
平15年(2003)	82	48	34
平16年(2004)	71	36	35
平17年(2005)	89	55	34
平18年(2006)	83	42	41
平19年(2007)	83	51	32
平20年(2008)	97	66	31
平21年(2009)	102	55	47
平22年(2010)	102	53	49
平23年(2011)	84	36	48
平24年(2012)	78	32	46
平25年(2013)	79	33	46
平26年(2014)	62	22	40
平27年(2015)	44	4	40

また、家族が青雲の生徒であり、やはり青雲を選んだという生徒も多数いる。兄や姉が、あるいは親が、夫が、妻が。兄弟姉妹が同時に入学したり、順番が逆であったりしながら入学することもある。

表13は、そういう生徒の数をまとめたものである。毎年、入学者のうち100人近くの家族が過去から未来にかけて、青雲と関わりを持つのである。

「最初」の列はその年に最初の家族の一員が青雲に入学したことを示す。平成27年の4は兄弟姉妹が同時に入学したからである。「2人目以降」の列は、「最初」の家族に続いて入学した生徒である。最近では入学生徒のうち40~50人は家族がやはり青雲生であったことになる。青雲の家族率(?)は高いと言ってよいのではないだろうか。

この数字は生徒住所から機械的にはじきだしたデータである。兄弟姉妹や親子が同居していないケースなども多く、現実にはより複雑で、より微妙な家族の姿がある。

入学した子どもを気遣う保護者の姿をスクーリングの朝にはよく見かける。子どもが行くから、自分も高校に入学したという親もいる。それで子どもより早く親の方が卒業してしまったり。中には孫を心配して自分も入学したという祖母も。子どもが逆に保護者となって、元気に登校する生徒(=親)の姿も。

青雲に見る家族の姿は多種多様である。

進路の問題

青雲卒業後の姿も見ておこう。青雲高校はそもそも勤労学生のための学校であった。だから卒業後も現在の仕事を続けるという場合が多い。だが近年、進学・就職の様子も変化している。右の表の通り、卒業後、学校幹旋で新規就職をしていく生徒が近年急増している。

[表14]進路実績

(単位:人)

卒業年度	卒業生数	大学	短大	専門学校 その他	学校紹介	自己開拓	家業・起業	勤続	長期バイト	短期バイト	家事	浪人	求職中
平21年(2009)	306	22	6	32	6	8	8	37	74	5	12	8	24
平22年(2010)	304	23	5	42	6	4	8	38	64	4	17	7	30
平23年(2011)	309	15	5	42	7	10	1	29	60	0	16	8	36
平24年(2012)	321	31	9	42	25	1	0	32	53	4	18	13	27
平25年(2013)	287	16	8	24	18	9	0	35	68	4	14	12	26
平26年(2014)	278	23	4	26	26	8	5	22	37	27	13	9	24

就職状況の変化なども含めて近年の進路事情について、進路指導部長の上谷先生に文章をいただいている。文章の最後にある通り、青雲生の進路は人生航路の針路なのである。紆余曲折を続けるのが人間の姿である。迷っても迷っても、それでも歩み続けようという気持ちが必要とするのが青雲高校のような学校なのだろう。

世間の常識とはかけはなれた卒業かもしれない。だがそれは当たり前だとも言える。なぜなら卒業後、何年もたってから次のステップへ向かう生徒も多いから。この数字は青雲卒業生の人生の一瞬を切り取っているだけなのだから。

卒業生版 進路のしおり

(教員寄稿 略)

第3章 情報化社会のただ中で

～校務支援システム・eラーニングとその周辺について～

通信制の教育を支える社会の基礎は日々変化している。

青雲の生徒と教職員をつなぐ基本は郵便制度であるが、それ以外のさまざまな方法で、青雲高校は在宅の生徒たちとのつながりを保ってきた。

近年のIT環境の進歩は社会を大きく変えてきたが、青雲高校も大きな変革を超えてきた。ここでは、青雲高校のIT環境の変化に着目し、その職員の言葉と推移をまとめた。

IT関連の発展について

年号	事項
平成9 1997	第一次校務支援システム完成 (ソフト制作：株式会社コア)
" 14 2002	第二次校務支援システム(12月) (ソフト制作：GSST)
" 15 2003	教科「情報」新設
" 16 2004	学校の情報化に関する兵庫県とマイクロソフト(株)の連携事業始まる ClassServer 研修所に設置 新教育システム実験の指定校に 第一次ホームページ開設(6/24カウト開始)
" 17 2005	e-ラーニングのレポート提出試行開始
" 18 2006	情報図書室のコンピュータ・LAN環境整備 相互連携事業の終了
" 19 2007	岩越教諭のテスト時間制作システム公開(1月) 地歴・家庭科などで電子レポート・電子放送視聴などの取り組み
" 20 2008	第三次校務支援システム運用開始(1年遅れ) (ソフト制作テクノホレーション) 教育情報化総合支援モデル事業の指定
" 21 2009	Seiun Web School 開設(制作テック) Moodleによる電子放送視聴開始 第二次ホームページ開設
" 23 2011	データ消失(1月)Nebula 開発始まる
" 24 2012	GSST との裁判が勝訴
" 25 2013	12月に終了予定だったシステムのリース期間を延長
" 26 2014	第4次校務支援システム(5月) SEIUN WebSchool は継続使用
" 27 2015	

IT前夜の通信制高校は、事務量の多さに教員も事務職員も悲鳴をあげるほどの職場であった。それがコンピュータの登場により、激変する。生徒の入学から卒業まで、すべての学習活動を見守るべく、校務支援システムが登場するのは20世紀の終わりの頃だった。

時代は情報化社会のまっただなかであり、学校教育の中にも教科「情報」が新設される。

青雲もホームページを開設し、平成16年には、IT社会の中の通信教育を模索するための研究指定を受け、マイクロソフトのクラスサーバー活用の道をさぐる。

研究そのものは頓挫したが、その頃の成果として今も生徒の学習支援に役立っているのが、SeiunWebSchool である。

また、4世代目の校務支援システムの登場にあたってはすくなく波乱もあった。

IT前夜と黎明期の苦労について、阿美好香元事務長(彼女は2度の青雲勤務とともに校務支援システムにかかわる)、校務支援システムなどの歴史やその苦労について旧職員の田中明浩教諭と榎本好子教諭に、またその後を受ける第4次校務支援システム(NEBULA と SEIUN4)について小池覚現教務部長に話っていた。

校務支援システムとは

単に成績処理システムでもなければ教務支援システムでもない。通信制単位制の青雲高校の生徒の学習は、教員一人一人の教育内容のみならず、事務室の活動などとも密接につながり、相互の連携がなければ成り立っていない。しかも入学までの経歴がさまざまな青雲生徒の持つ過去成績などは県下全域の高校の複雑さを背負う。

各セクションの連携の複雑さゆえ、紙ベース処理が当たり前だった時代、教職員の仕事は多忙を極めた。

その状況を一変させたのが、コンピュータである。

コンピュータとネットワークの機能を最大限活用し、生徒の学習を逐次に、あるいは卒業(退学)後、何年にも渡って管理しているのが、青雲の校務支援システムである。

何度かの更新を経て、現在は4代目になっている。



[平18年 情報図書室オープン講座]

懐かしき過去と未来と

(事務長 寄稿 略)

(画像 略)

[第一次ホームページのトップ画面]

コンピュータ黎明期の頃

(教員 寄稿 略)

校務支援システムの変遷 とSeiunWebSchool

(教員 寄稿 略)



[Seiun Web School RS個人票]

eラーニングとSeiunWebSchool

コンピュータなど情報端末を使用した学習を広くeラーニングという。

SeiunWebSchoolはインターネット上でeラーニングによる仮想学習空間を作り上げようという構想であったが、そこまで発展はせず、生徒個々が自分の学習状況を参照する機能を持つのみである。しかし生徒が受ける恩恵は大きい。

RS個人票

生徒のR：レポート・S：スクーリングの発行時点までの進捗状況をまとめて知らせる個人票で、月1回発行される。

学習ペース構築のために、生徒にとっては重要な通知文書となる。また、校内の成績記録と個々の記憶が一致しない場合(例：出したはずのレポートが記録されていない、など)を洗い出す役目も担っていて、この意味でも重要。

放送視聴

NHK高校講座など教育放送をスクーリング出席の一部として代替できる制度。リアルタイムのNHK番組以外にもNHKホームページに公開された動画などを利用して可。



[作者不詳 謎のエイリアン学生と花子さん]

冬の日的事件とNEBULA誕生

教務部長 小池 覚

今では笑い話だが、その時は本当に校舎の3階から飛び降りようかと考えた。冗談ではない。

平成23年1月末の金曜日、午後3時過ぎの職員室の中で、自分の口の中がシュッと乾いた感覚を今でも思い出す。当時のシステムのある部分を誤ってダブルクリックして(一般の人が簡単に開ける場所ではありません)、何か操作が実行されてしまった。何が起こったのか最初はわからなかった。しかし、ある先生の、生徒への電話対応の言葉に僕は驚愕した。

「うん、ちょっとあなたのレポートと出席調べてみるね・・・あれ、データが出てこないなあ、おかしいなあ、コンピュータ動いてないのかな。小池先生、これおかしくない？」

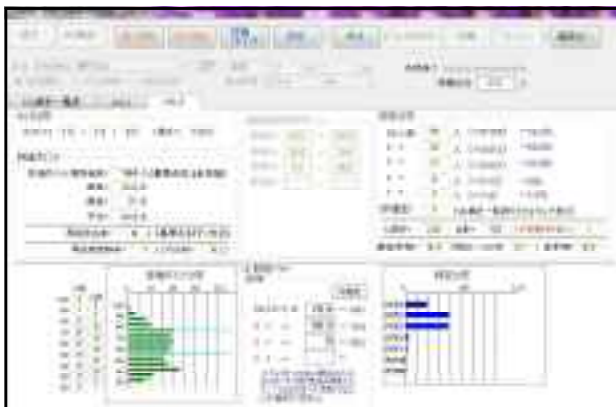
見ると、システムは動作しているが、4月から積み上げた、ほぼ1年間のデータがすべて消えている。まさか・・・僕は慌てて3階のサーバーが動く部屋に向かった。調べると、確かにデータが消えている・・・するとさっきのクリックは・・・その時、僕が思ったのが、本当に窓から飛び降りることだった。いや、3階だと駄目だ。ポートタワーくらいの方がいいかな、とか。とりあえずこの学校にはもういられないだろうな、とか・・・

落ち着け、何か方策はあるはずだ。そう思って気がついたのが、この日の朝までのデータは田中先生が保存しているということだった。あれを使えば、今朝までの状態は復元できる。では今日のレポート添削のデータは？そう気がついて、僕はそのまま事務室に駆け下りた。「今日のレポートは？もう郵便屋さん来て持って帰った!?すぐ取り戻してください！早く！」

恐らく必死の形相の僕の勢いに、当時の阿美事務長は押されて、異例の処置をすぐさま行ってくれたのだろう。その後、教頭・事務長に事情を話し、翌日の土曜日は一人で、そして翌々日の日曜日に出校職員全部で大規模なデータベース修復作業に取りかかった。

次期校務支援システム構築の初期に起こした、とんでもない失敗で、僕にとっては永遠に記憶に残る事件だが、今、他の人に聞くと、そんなことあったかなあ、とか、のんびりした言葉が返ってくる程度の事件である。

この事件の後、第4次校務支援システムとして Nebula の開発に僕は本格的に取り組み始めることになる。



[NEBULA 成績処理画面]



[第2次ホームページのトップ画面]

青雲の校務支援システムは学校の命綱のようなものであると思う。これの最初を作った佐々木先生や阿美事務長の苦労はすごいものだったと思う。

第4次更新は以前の手直しだけのはずだったが、結局ほぼ手作りのものになった。業者の倒産や訴訟、著作権問題のからみがあったのだから。業者を交えた会議で阿美事務長が「全部作り直してください」と叫んだことや、職員の委員会で、ある先生から「本当に業者が何千万かかると言ってるものを作れるんですか？」と懐疑の言葉をなげかけられたことなどは忘れられない。業者と折半しながら作るという提案も結局、県の指導でなくなり、最終的には自作の Nebula と Seiun4に落ち着いた。

大きく、複雑にデータの絡み合った既存のデータベースを解析し、それを生かした新規プログラムを開発するのに、数年間を費やしたことになる。「たかが入力系だろ」と言っていた人が、朝のミニ研修で、Nebula の工夫を認める発言をしてくれたのも印象的だった。

Nebula (ネビュラ)という名前は「星雲」から取った。当時の高木教頭が「何か名前をつけたらいいんじゃない」と言ってくれたことからつけた名前だ。由来は、県からのメールでさえ時々「星雲」と変換間違いをされて、「青雲」高校のまがいものという、ちょっと自虐的な意味あいにつけた。でも同時に僕には、作り上げたおよそ7, 80のプログラムが星々の瞬きにも感じられる。

どこまでこのシステムが生き続けるかわからないが、とりあえず青雲高校の命綱として今日も Nebula は膨大な生徒たちの活動データを追いつけている。

第4章 海と山と時を越えて ～協力校・月面クラスについて～

青雲高校の最も大きな集団は本校日面の生徒で、基本的な枠組みはここから始まる。しかし青雲高校は通信制という多様な側面を持つ学校でもある。「いつでもどこでも」勉学を始められる環境こそが通信制高校の理想とするところである。だから通信制高校は他の県でも協力校という形で、県内いろんな場所でも学習できる環境を作っている。学習のネットワークこそ通信制の目指すところなのではないだろうか。またいつでも勉強できるという面について言うなら、通信制のレポート勉強こそがそれなのであるが、スクーリングで言えば、時間を越えた学習環境を構築することも目指すところの一つであると思う。

青雲高校には柏原・洲本の2拠点に協力校を持つ。また日曜スクーリング以外に月曜スクーリングも開講されている。これは他県の通信制高校と比べて決して大きなものとは言えないが、これが青雲高校の空間と時間を越えた学習環境の広がりなのである。この章では協面・月面に焦点を合わせてみよう。まず、現在の協力校担任に文章をいただいた。



洲本協力校

(教員 寄稿 略)

柏原協力校

(教員 寄稿 略)



[柏原高校の雪景色]



[洲本実業高校から眺めた大阪湾]

協力校在籍数

(単位:人)

年度(西暦)	柏原	洲本	姫路東	社	八鹿	山崎	香住	備考
昭40年(1965)	24	45	752	106	86	20	23	
昭41年(1966)	41	60	766	118	89	27	117	月曜クラス設置
昭42年(1967)	25	39	748	110	81	24	20	
昭43年(1968)	25	30	702	77	92	25	19	
昭44年(1969)	30	26	634	66	97	28	18	
昭45年(1970)	37	33	625	63	96	31	20	武庫工業高校が協力校に
昭46年(1971)	37	37	660	68	93	31	17	
昭47年(1972)	31	32	659	61	85	27	16	
昭48年(1973)	31	33	705	70	136	37	16	
昭49年(1974)	31	33	705	70	136	38	17	
昭50年(1975)	26	30	701	72	132	45	17	武庫工業高校協力校廃校(3月) 姫路分校設置
昭51年(1976)	35	38	713	73	112	49		香住協力校廃校(3月)
昭52年(1977)	44	38	444	48	50	69		
昭53年(1978)	73	50	472	63	55	43		
昭54年(1979)	87	68	367	58	39	33		姫路分校と協力校の廃校決定(2月)
昭55年(1980)	86	61	242	43	25	24		
昭56年(1981)	56	54	161	26	21	7		

年度(西暦)	柏原	洲本
昭57年(1982)	55	48
昭58年(1983)	39	39
昭59年(1984)	33	33
昭60年(1985)	43	37
昭61年(1986)	38	42
昭62年(1987)	45	44
昭63年(1988)	42	42
平元年(1989)	51	83
平2年(1990)	40	40
平3年(1991)	37	25
平4年(1992)	44	37
平5年(1993)	60	31
平6年(1994)	61	41
平7年(1995)	72	49
平8年(1996)	72	41
平9年(1997)	70	43
平10年(1998)	72	46
平11年(1999)	66	57
平12年(2000)	74	59
平13年(2001)	68	62
平14年(2002)	76	60
平15年(2003)	68	67
平16年(2004)	68	64
平17年(2005)	68	61
平18年(2006)	65	65
平19年(2007)	69	73
平20年(2008)	64	68
平21年(2009)	63	61
平22年(2010)	59	66
平23年(2011)	69	64
平24年(2012)	54	62
平25年(2013)	61	52
平26年(2014)	66	51
平27年(2015)	66	43

協力校

兵庫県養父市のJR養父駅近くに全但バスの「養父グンゼ」停留所がある。(左上写真参照) グンゼは衣料品メーカーとして有名な企業である。しかしこの停留所近くにグンゼの関連施設は見当たらない。いつの時点でなくなったのか、全但バスに問い合わせたがよくわからなかった。養父市の中でも少し北の八鹿には「八鹿グンゼ」という停留所がある。八鹿には但馬の近代化産業施設遺産として「グンゼ事務所棟」が残されていて、見学もできるようである。稼働している工場は今そこにはない。

実は「養父グンゼ」には、青雲の八鹿協力校生徒が多くいた。「養父グンゼ工場」に勤務する生徒であり、かつてこの生徒達をめぐって紛糾した時代があった。1974年7月1日付けで当時の校長・教職員から養父グンゼ工場や但馬労働基準局などに宛てられた文書が今でも校長室には残されている。生徒の積極的な登校ができるよう勤務状態の改善を依頼する要請書であり、工場からの真摯な回答も残されている。時代の流れを感じる。

協力校の体制は創立前の昭和32年以来のものである。代表的なものは上の表にある学校だが、備考の武庫工業高校の協力校のことや、技能連携校などとのつながりも考えれば、校外とのネットワークの実態はかなり複雑なのだろう。各協力校の生徒数の変遷など興味深いのが、残念ながらここではそれを追う時間はない。

さて、姫路東高校の協力校が姫路分校となり、社・山崎・八鹿などの協力校を率いる本校相当の機能を持つようになるのが昭和50年だが、57年3月には姫路分校とその協力校は廃校となる。それ以来、青雲の県下での協力校機能は柏原と洲本だけになる。

県全体としては網干高校通信制課程とその協力校があり、県内全域をつなぐネットワークはできていると言えるのだろう。青雲の立場からすると、もし歴史が違っていたら、青雲の姿は大きく変わっていたのではないだろうか。想像にしかすぎないが、興味深いと思う。

月面在籍数

(単位:人)

年度	計	1年	2年	3年	4年	男	女
平13年(2001)	90	14	10	35	31	28	62
平14年(2002)	109	19	17	30	43	42	67
平15年(2003)	107	11	22	28	46	31	76
平16年(2004)	92	7	11	35	39	30	62
平17年(2005)	101	19	14	21	47	34	67
平18年(2006)	94	14	21	29	30	34	60
平19年(2007)	90	9	16	30	35	30	60
平20年(2008)	90	10	17	25	38	32	58
平21年(2009)	81	13	13	22	33	24	57
平22年(2010)	81	16	16	14	35	23	58
平23年(2011)	79	14	16	19	30	20	59
平24年(2012)	74	11	18	20	25	16	58
平25年(2013)	62	6	11	23	22	14	48
平26年(2014)	56	9	9	13	25	16	40

月面

月面在籍数はなかなか正確には追いきれない。ここでは現在、校務支援に残る2001年以降データから数を追った。漸次減少と女生徒の増加がはっきり目に見える。育児・介護などの事情のある生徒が主となってきたからである。

ただ月面はクラス生徒だけではなく日面から乗り入れる生徒も多い。少人数で限られた講座しかない貧弱な環境だが、存在意義は大きい。いや、少人数だからこそ維持できる、大事な環境と言うべきか。

次に協力校や月面担任経験を持つ旧職員の教諭二人に、思い出を語っていただく。

洲本クラス担任を振り返って

(教員 寄稿 略)

青雲高校での思い出

(教員 寄稿 略)

終わりに

ここまで、青雲高校の過去から現在までを、駆け足で見えてきた。内容を追ってきていただいた皆様にはおわかりになったと思うが、この学校に一瞬でも関わった生徒の数は数え切れないほどである。そして多様である。

通信制高校は社会の中でささやかな調整弁として、長年の間、機能してきたのだろう。そしてこれからもその役目は果たして行かろう。日の当たらない存在であるのは確かだと思う。そもそも日が当たることが本当にいいのかどうかもわからない。

多様とは決して手放して喜ぶことではなく、重いものもひきずっているのが正直な姿である。

経済的な理由で、あるいはその他のさまざまな理由で通信制を選ぶ生徒は多い。ある種の学校社会では不適應を起こさざるを得ないような生徒もいる。普通に見えて、その背後に重いものを背負う生徒もいる。

しかし、彼ら彼女らは通信制という、足かせのはずれた環境で息をつき、ためらいながら再び歩み始めることを知って行く。再生していく生徒もいれば、いつの間にか消えていく生徒もいる。それが通信制の現実である。

この特集で確かめたかったのは、通信制の通信ということが、いかなる形でつながることを意味するのかという問題である。最終章を協力校と月面で終わるゆえんである。

時代は変転する。かつての高度経済成長の時代に構築された県内のネットワークは果たして今でも機能しうるのだろうか。また新しい時代の教育のつながりはいかなるものであるのだろうか。

4円切手でレポートがつながり、学習グループの構築や協力校・技能連携が大きな意味を持っていた時代から、インターネットが通信のあり方を大きく変える時代、人の意識もそれに合わせ大きく変わり、通信制を求める生徒の意識も変わっている。つながりはより小さく私的なものになっていこうとしている。

私立広域の通信制が増えていく背景にはそんな社会情勢もあるのだと思う。

次世代の公立の通信制高校のあり方・・・実はそんな大それた問題に一介の県立高校教師が解答などは見つけ出せはしない。

ただこういう見方から、この青雲の50年を振り返った時、何かを過去は伝えたがっているのではないかな、と思うのである。

特集の最後は本校日面・月面・協力校の担任を歴任し、さらにこの数年間は生徒指導部長として生徒を見守っていただいている〇〇先生の言葉を紹介して終わりたいと思う。

[特集担当:小池覚・〇〇〇〇]

変わっていく青雲高校

(教員 寄稿 略)